

たまいたま 川柳



定時総会社告

平成29年
2月号 (No.687)

日川協加盟

巻頭言

枯淡といふこと

願法みつる

有根の植物が枯れるのは次の盛りへの雌伏だろうが、生ある人間のそれが単に生気を失って朽ちてゆくだけでは残念である。高齢化社会の問題ではあるのだが。

それならふっと大きく息を吸い込んで、枯淡という生き方を考えてみるのも一興であり大事かも知れない。人柄が練れて淡々とした中にも深みのあるさまとは、心憎い姿ではないか。書画・技芸・詩文などで表現される優雅な円熟味・と言われると、改めて老いの生き方にあたたかな目線の世界を味わえそうな気がする。

例えば書画と来れば禅画、技芸と言えば能、詩文となれば俳諧などが思い当たる。これらはなべて簡素に透徹した精神的な宇宙観を示していると言えるのではないだろうか（そんな表現が先ず難しいのだが）。

そう。枯淡の美的感覚とは、極力無駄を排した薄墨的な表現で、森羅万象の奥義を表白しようとするところにある。省略と間の世界で、表現者は十二を訴えるのか、また第三者はどう受けとめるのか。

川柳の世界にも当てはめてみよう。無駄を削ぎ落とした枯淡の句の在り様から、延長余命の生き甲斐を生々として味わいたいものである。

日日是好

願法みつる

平等というカラクリの裏表

ニンゲンのカツラをとれば鬼の角

判決がどう転んでも金が要り

本当は笑っていないピエロの目

出来合いの審議で紙をめくる音

日本の神話が消えた民主主義

キリンにはアッパーカット届かない

勝った負けたは騒がない神である

ご無理とは知ってご無理を願います